

《報告》

出席簿性別欄の扱いに関する早稲田大学文学学術院の取り組み をふりかえる

*A Review of Changing Policies Concerning the Inclusion of Gender
Information on Attendance Registers in the Faculty of Letters, Arts and
Sciences at Waseda University*

2017年度春学期から、早稲田大学全学部・研究科において、学生出席簿から性別記載欄が削除された。あわせて名簿表紙には、担当教員へ向けて、性的少数者学生への配慮として、「くん」「さん」などの、併用すれば性別を示しうる敬称はどちらかに統一するのが望ましいこと（多くの場合は「さん」がよいだろう）、授業中の性的事象や主題への言及は、性的少数者学生の存在、その人権の擁護を常に念頭においてなされるべきであること、等が記載された。

2014年度春学期、当時文学学術院教務の一員であった私は、文化構想学部・文学部の広報担当教務主任と、文学部の学生副担当を兼務し、日々在学生との面談の機会があり、そのなかには当然、性的少数者学生も含まれていた。講義中に教員から性的少数者への差別的発言があったとの訴え、教育実習中のトイレや更衣室使用の悩みと不安、そうしたさまざまな相談に、私にできる限りにおいて対応していくなかで、出席簿性別欄の問題ともそこで出会った。聞くと、授業中に出席簿を学生に回覧し、学生本人に出席のチェックをつけさせる教員もいたという。学籍番号や出席状況その他、個人情報流出への教員の鈍感さに唖然としたし、「個人情報」には性別記載（M/F）も含まれている。戸籍で規定される性にとらわれず生きたいと願う学生たちの心情を思えば、胸がきりきり痛む。

文学学術院教務内で、さっそくこの件を問題提起した。最初は、出席簿から性別記載欄を削除することを提案したのだが、「演習の班分けには男女比を考慮する必要があり、よって学生の性別の把握は必要」「全教員の理解を得るには時期尚早」「個別の学部・研究科だけの判断では動けない」等、他にも多くの懸念の声があり、教務内そして事務方から上がり、実現には至らなかった。そもそも授業運営に性別情報が必要かと、私には納得しがたい思いもあったが、こうして教職員間で率直にこの種の問題を、学術院内の会議体ではおそらく初めて議論できたことは、じつに貴重な機会であったとも感じている。

そういう次第で、2014年、文学学術院内の出席簿性別欄削除は見送られた。だが、せめて全教員への注意喚起文書は配付するべきだと重ねて主張して了承を取り、文書案を作成した。作成にあたっては、同じ文学学術院ご所属で、ジェンダー研究所所長の村田晶子教授にご助言を乞い、また複数の当事者学生にも意見を聞いて、それを反映させるべく努めた。2014年の5月連休中に、その文案を作成したことをよく覚えている。その結果、同年5月のうちに、当時の学生担当教務主任お二方のお名前を記した文書が、専任・非常勤を含む文学学術院全教員に配付された。

文書の詳細は、紙幅の関係もあり、冒頭に記したこの17年度春の全学出席簿表紙の配慮願いと重複しているので反復は避けるが、文書作成者としてまづなにより先生方にお伝えしたかったのは、第一に、一定数の性的少数者学生がわれわれの学術院には確実に在学しているということ、このあまりにも「自明の」、だというのに自明になっていなかった（今でも？）点。第二に、性別は個人の尊厳、その生き方の選択にかかわる事柄で、こちらは決して「自明ではない」ことに気づき、個人と個人、個人と集団の関係をつくっていくなかで、その都度個別的に繊細に、相互に立ち位置を定めていくべきものだ、という点。

もし2014年度のこの文学学術院の取り組みが、本17年度の全学的実践のひとつの契機となったのであれば、そこにかかわったものとして率直に嬉しく思

う。一方で、当時の文学学術院の努力も、そして最近の本学のダイバーシティに向けての取り組みも、まだまだ途上にあり、幾多の不備、批判される点を含んでいることも忘れてはならない。(たとえば14年の文学学術院の文書では、「性同一性障害」という語の使用について、のちにご批判をいただいた)。

また、政治的弾圧、「社会主義リアリズム」と呼ばれた当時の政治的な「正しさ」によって、表現の自由が蹂躪された1920年代のロシア語文学研究から出発した文学研究者である私個人として、こうした人権にかかわる最重要の問題に際してさえ、表現の規制については最大限慎重になるべきだという意見を持っていることを、最後に申し添えておきたい。

たとえば「くん」「さん」の使い分けについて。私自身は、いま学生に対して「くん」という敬称は使わない。「さん」で統一している。けれども今後の生涯のあらゆる場面で、むろん大学教員としてもそれが良いと感じる場面であれば、私は「くん」という単語を使うだろう。「くん」という日本語の一単語、これまで無数の日本語使いが、溢れる愛情と親しみ、喜びをこめて口に、書き記してきた「くん」を、「傷つくひとがひとりでもいれば」という「正しさ」のもとに、大学という空間から一掃せよという教職員への強制がもしなされたら、私はそれを暴力と感じるだろう。潜在的にひとを傷つける可能性をもたない言葉、表現など存在しない。

そういった生硬さ、悪しき意味でのきまじめさ、というものは、私がとても苦手なもので、多様性というアイデアのなかでのルールづくり、その運用の弾力性の余地と言うべきか、個別性の許容について、いま考えているところなのである。